

研究成果として教材開発を行った。教材開発にあたっては種々、新しい観点を盛り込むよう努力したが、そのなかでも文学史の最重要課題たる時代区分について、以下若干の報告を行う。

通常、国文学史において「上代」は奈良時代より前を指すというのが通説であるが、本教材ではこれを百年引き下げて、九世紀の終わりまでを「上代」とした。当然、その分だけ「中古」の開始時期も繰りさげる。また「中古」の終わりについては、十二世紀なかば、院政期の後半とした（これは近年の学界における有力説に拠る）。「中世」はほぼ従来通り、鎌倉・室町時代としている。「近世」は、安土桃山時代を含めるか否かで諸説あるが、明治維新以前とするのが通説である。しかし本教材では明治二十年代、すなわち十九世紀の終わりごろまでを「近世」に含めた。

このうち①「上代」の下限を引き下げたこと、②「近世」の下限を引き下げたことについては、以下の理由によるものである。

本教材において新しく「上代」に含まれることになった百年（ほぼ九世紀全体）は、従来「国風暗黒時代」と呼ばれてきた時期である。これはすなわち「万葉集ガ出テ古今集ガ生レルマデ」（吉沢義則氏。以下同じ）の期間に該当し、漢詩文がひろく流行する一方、日本語による文芸（和歌）が低調であったことで知られる。この時期を上代文学に繰り込むと、例えば『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』といった九世紀の勅撰漢詩集と、奈良時代の漢詩集『懐風藻』が一連のものとして捉えられる。さらにまた『古事記』『日本書紀』など奈良時代の歴史書が漢文で書かれていること、『万葉集』が漢文学から圧倒的に大きな影響を受けていることとも連続性が生じ、九世紀以前の文学は日本語による表現がまだまだ未熟な段階にあり、同時に中国を文化的な権威と認める態度が強かったため、まずは漢文による文学として出発し、その影響から容易に脱することができなかつた、という文学的な見通しを得ることが可能になる。

こうした時代区分は、近年の歴史研究からも理論的な裏付けを得ることができる。佐藤全敏氏は、八・九世紀は唐文化が尊重された時期であるのに対して、十世紀に入ると唐文化が相変わらず尊重される一方で日本の伝統的な文化も見直されるようになり、両者が併存して貴族社会で愛好されるようになると指摘しておられる。九世紀の終わりは「唐（漢）文化一辺倒から唐（漢）文化と国風文化の並立へ」というエポックメイキングな時期であり、文学史の上でここを一つの区切りとし、それ以前を「漢文学中心の時代」として把握することには合理性があるといえる。

次に「近世」の下限については、すでに明治三十年代に岩城準太郎氏『明治文学史』が「明治十年以前は文学界の暗黒時代なり。文運地に落ちて新光明未だ起らず、喘々焉として余息を存する者は、唯憐れむべき旧文学の残骸なりき」「畜に十年頃までのみならず、種類によりては二十年前後、文学思想革新の運動起るに至るまで、依然として旧態を改めざる者あり」との指摘があり、明治二十年以前の文学に近世の遺風が強かったとする見方が示されている。

実際に小説に関して言えば、坪内逍遙『小説神髓』（明治十八年）、二葉亭四迷『浮雲』（明治二十年）をもって近代的な西洋型の小説が出発するというのが通説であり、それ以前の戯作文学、政治小説等はいわゆる近代小説とはよほど趣を異にするものである。詩に関しては、明治二十年まではもっぱら七五調に用いた新体詩の時代であり、短歌、俳句については伝統的作風をもっぱらとする旧派（桂園派和歌と月並俳諧）が中心であった。演劇については歌舞伎が中心で、河竹黙阿弥が数多くの名作を残した時期であり、壮士芝居（新派）の出発は明治二十年代以降である。以上をまとめれば、明治二十年までの文壇はおおむね江戸時代以来の伝統的な形式や韻律に拠っている。主題、趣向面では新時代らしい工夫もないわけではないが、手法、形式、表現面から近世文学の延長と考えることも可能である。

以上の見地から、本教材では試みに上記のような時代区分を採用したものである。この時代区分が教職教育上いかなる効果もしくは問題点を有するものであるかについては、今後、教材を実地の授業に使用するなかで確認を進めてゆきたい。

以上のほか、時代区分に関する研究成果の一部を論文にまとめ中村健史「後水尾院と『三体詩』」（『国語国文』91-2、2022年2月、査読あり）として発表した。